

# 序

電解質異常はすべての医師がその日常診療において診る機会がある“異常”である。その初期対応の遅れは重篤な結果につながることも少なくない。このため電解質異常の初期対応を担うことが多い研修医や専修医の先生はその初期対応に精通している必要がある。

本書では電解質異常として高ナトリウム血症，低ナトリウム血症，高カリウム血症，低カリウム血症，高カルシウム血症，低カルシウム血症，高リン血症，低リン血症，高マグネシウム血症，低マグネシウム血症の10項目をとりあげた。これらは、直ちに何かをしなくてはならない、つまり緊急性のある電解質異常であることも、明日みてもよい、つまり緊急性のない電解質異常であることもある。この両者の鑑別、そしてそれぞれにおいてまず何をすればよいのか、そして次に何をすればよいのか、それが大事となる。

総論として第1章では最も大事な電解質異常の緊急性の有無について、第2章では電解質異常の症状と心電図異常について、そして第3章では臨床で常に問題となる電解質異常に注意すべき薬剤、高齢者や担癌患者の電解質についてとりあげた。続く各論では第4章で各電解質についてその症状、原因、診断、そして治療についてわかりやすく解説し、それを踏まえて最終章の第5章では各電解質について緊急性のある電解質異常を計13症例、そして緊急性のない電解質異常を計13症例、典型的な症例を通して学べるようにした。

本書を読むことで迷いがちな電解質異常に対する診かたや考え方、さらに動き方まで理解することができる内容となっている。電解質異常のFirst Aidとして本書を活用していただければ幸いである。

2018年3月吉日

川崎市立多摩病院腎臓・高血圧内科  
今井直彦